

イスラエルの作家の非文学的現実¹⁾

A. B. イェホシユア
(翻訳：勝又 直也・悦子)

イスラエルの作家の非文学的な現実とは、文学的現実よりも、昨今、ますます現実味を帯びて、激しく、顕著になってきた。作家が、大会、デモ、嘆願書の署名に姿を出し、シンポジウムで喋り、新聞に寄稿し、宣言をし、講演をし、軍隊の宿営や学校を巡っているのを見る。非文学的現実がより感じられる作家、詩人を何人も挙げることができる。そんなことはしないが。

作家の主要な戦場が、彼らの間では、書物や文学ではなく、審美的な問題ではなく、文学理論の論争ではなく、政治政策であり、社会問題であり、公共の道德問題であることが突然明らかになる。例えば、占領地の将来についての論議が、ユダヤ人の歴史の理解自体、シオニズムの内容などについての更に幅広く深い議論をもたらす。

作家たち、特に建国の世代の作家たちが、象牙の塔にこもり、現実からかい離していることに憤慨していた50年代の文学批評家や活動家たち、その同じ彼らが、今日、作家の何人かを彼らの象牙の塔に戻して、外からいくつも掛金をかけて、そこから外に出られないようにしてもよいと思っているくらいだ。

作家は書いていればよいのだ、それが詩であっても、物語であっても、妙なことであっても、現実的なことであっても、抽象的なことであっても。要は、作家が叫ぶのをやめればよい、というわけだ。

公の議論の意義に対する不信感からか、公衆への恐れからか、あるいはこだわりからは知らないが、あたかも、無口で、その声を聞かせず、あらゆる非文学的な行為を控えていた者たちも・・・また、あたかも物書きの机に向かって座り、書くために、そして書くためだけにそのようにしていた者たちも・・・彼らにもまた、詩や散文の冊子の間に、新聞があっただろうし、そして、彼らの前にも、いつもトランジスターラジオが置いてあり、それを聴いたり、もしかしたらそれに対して喋りかけたりしたであろう。そして彼らにも以下のことが明らかになった。崇高な精神的源泉から、文学のみにささげられなければならないはずのそのエネルギーから、非文学的なもののために汲み上げられ、吸い上げられたことを。

最新のエノク・レヴィンの戯曲「シッツ」も、我々の生活における国家の存在感を見事に描写している。

私はフッパの下で見てしまった。私は私の夫の唯一の花嫁ではないことを
夫のもう片側には、その爪を夫の腕に突き刺している、
国家が立っていた。
私たちが進むと、それもまた私たちについてきた。
それは、昼も夜も、私たちについてきた。
それは、私たちとともにベッドにも入ってきた。
私たちとともに食卓にもついた。
あらゆるところから、それは私たちのもとに来た。
天地の震撼を通して、
ラジオ、新聞、映画を通して
水道管を通して、
壁の割れ目やブラインドの格子を通して、
それは、私たちから太陽や星を隠した。
それは、私たちの目、耳、鼻に入り込んだ。
それは、私たちの皮膚の孔にまで入り込んだ。

この二年間、作品がまったく書かれなかったとは言わない。しかし、なぜか、それらの作品は私たちの生活の中心にはなかった。それらの作品からは重要性というものが取り除かれていた。

果たして作家は、このことに対して弁解が必要なのか。はたして、ここ何年も、自分の周りの現実はいかに非文学的であったと弁解しなくてはならないのか。もちろんそうである。そもそも作家というものは、自分が創作自体に費やしていないあらゆる瞬間について弁解する必要がある。ものを書いていないあらゆる瞬間について。生活しようとしていること自体について。寝ること、食べること、子どもを育てること、これらは全て、(作家にとっては本来) 虚しいものである。内なる声(そして外なる声も) 絶えず彼を追い詰めて言う。お前がやるべき唯一のことは、書くこと。書け! 書け、書け。もしできるなら、美しく、良く書くこと。しかし、大事なことは、決して書く手を緩めないことである。

では、作家はどのように弁解するのか。このように言えるだろう。イスラエルの現実はいかに、ここ数年、こんなにも文学的になったので、その現実に関わることは、一行を書くまでもなく、文学の具現なのだ。狂気のような幻影が、政治的な現実になった。個人的な神経症的なおびえは、党の綱領として書かれている。個人的で劇的な対立は、ニュースのヘッドラインで伝えられている。コメディ、ばかげた茶番劇が、裁判所の「判例」のように現実のものとなった。本来は文学の合法的な領域に属するものであるはずの、

多くの隠された精神的な潮流が、あらわに、そして力強く、外界の現実の中に飛び込んできたのだ。

作家は次のように言うことができる。これ以上、どうしたいのか。イスラエルの政治はこんなにも文学的で、気まぐれで、理不尽で、感情的で、そこに関わること自体が文学を書くようなものだ。しかし、もちろん、こんな言い訳が通るかどうかは疑わしい。なぜなら、文学的現実などないし、逆に文学的でない現実などありえないと、皆知っているからだ。全ての現実は、夏の日に湖のほとりでゆったりと横になることで、そこで何がなされるか次第で、ドラマティックな現実となる。

より深く印象的な言い訳は、作家の非文学的現実を、預言者が緊急に必要とされていることに関係づけることであろう。この必要性は、近年イスラエル国家で生じていることだ。預言者の基準は、いくつかの専門家たち——東洋学者、軍事評論家、政治学の教授、経済専門家たちの大打撃の失敗の後では、特に、著しく拡大した。突然、これらの専門家が本当の現実というのを外していることが明らかになった。そして、今、彼らはより慎重であろうと努めており、彼らの学術的な予見も、「～のように見える」「おそらく」「・・・もありうる」「ある意味で」「様々な選択肢」といった言葉で、「和らげ」ようにしながら、気持はもううんざりしている。

大衆は、自分たちが深い深淵の傍に立っているのを感じている。そしてその深淵は自ら埋まり、いつか晴れた日に我々は落ちていて自分たちの道を歩み続ければよいという甘い幻想、そんな幻想は、崩れ落ちた。いよいよ、明らかになったのは、我々はその深淵に落ちるにせよ、その上を飛び越えるにせよ、いずれにせよ、その傍らにしばらく立っていなくてはならない（それもまた心地良いものではない）ということである。このような状況では、以下のような感情が生じる。すなわち、真の問いは、この深淵の深さや幅に関するものではなく、飛び越える角度に関するものでもない。大衆は、もっと何か具体的で全体的なものを求めている。その深淵を本当に力強く飛び越えることを助けてくれるような何か預言を。大衆は、根本的な問いに対する回答を根本的な答えで求めている。どのようにして自分たちはこの深淵に到達したのか。そして何がその背後に広がっているのか。この答えを求めらる中で、大衆は預言者を懐かしむようになる。つまるところ、我々は、預言者の民であるから。大衆はよい預言を求め、そして様々な預言を受け入れる用意ができています。大衆は、憤怒と叱責の預言者の言葉も、慰めと偉大に行いの預言者の言葉も聞き入れる用意ができています。大衆は、もっとも残酷な叱責さえ受け入れることができる。時に、私は驚嘆する。ヨム・キップール戦争以降、私たちの大衆は一体どうしてしまったのかと。黙って座って、自分たちについての残酷な言葉に耳を傾けている。大衆は、言われる言葉に同意はしないが、傾ける耳はある。マゾヒス

ティックな楽しみのようなものである。勿論、大衆は、時には、憤怒の預言を、気宇壮大な預言——例えば、来る日に異国人が全て我々の前にやってきて平伏するだろうといった預言——でもって、バランスを取らなくてはならない。確かに後者の類の預言は預言のメニューに含まれているし、大衆はこれを諦めることはできない。いずれにせよ、大衆は知っている。聖書に見出される預言は、発せられた預言のごく一部にすぎない、真の預言と偽の預言の分類は後の世代が行うとして、現段階では、全ての預言に耳を傾ける用意がある、と。

だから、このような感覚がある時、つまり、「さあ、私の民に預言せよ」といったある種の叫びが人々の間を駆け抜けている時、作家は気を引き締め、自分自身に問う。なぜ私ではないのか。あらゆる作家には、いや少なくとも作家の一部には——これは何もユダヤ的現象でもないのだが——、頓挫した預言者という像があるものだ。そこで作家は自分に言う。時が来た。良い巡りあわせだ、と。作家はまた、あらゆる類の新聞記者、予備役の将校、解説者と東洋専門家を疑っている。というのは、これらの人種は、たやすく自分たちの職業を変え、あっという間に専門の預言者になってしまうような人々だから。だから作家も急いで、自分もその構図に入りこもうとする。確かに彼には、そのために必要な資質が十分あるのだ。言葉の能力。イメージをうまく使うこと・ある程度の抽象化（しかしやりすぎないこと。預言者が抽象的な哲学者になることは禁物。大衆をあっという間に失ってしまうから）。また少々神経症的であると、預言にとっても常にふさわしい奇妙さというものを与えてくれる。支離滅裂な想像力があると、イスラエルの現実には望ましい。大衆の意見に迎合しないこと——「誰が何と言おうと」とか、「でも、逆に」という感覚を持つこと。ところどころでは、特別な道徳的感受性——これはいつも預言の重要な要素となってきた。

このように、今日イスラエル国家に進行している「預言プロセス」に、作家も巻き込まれている。彼は言うだろう。「現実が私をそうさせた」。しかし、これは真実のごく一部だ。現実が彼をそうさせる——正しい。しかし、彼もまた、現実に対して自ら身を投じる。彼はそこにいる。政治・社会的な生活の中の複雑に深いところにおいて、彼のペンを、明らかに文学的ではないもののために貸し出し、そうすることにより、自分の文学的創造性を危険にさらしている。作家の文学外での活動があたかも彼の文学的創造性を褒め讃えるという幻想など、作家は抱いていない。自分の純粋な創造性が必要以上に失われることのないように、ある程度はその創造性を弁護しさえする。人々が彼に忠告するために、悪い例を持ってきて、「あなたも、自分がどうなるか、すぐにわかるよ」という時、彼はためらいがちに逆の例を持ち出す。ドストエフスキー、ブレネル、アルテルマンのようなビッグネームである。勿論、人々は彼に言うだろう。「よくもあなたは、自

分をこれらのビッグネームと比較できるな」。

いずれにせよ、これが、創造性の消滅へ向けての、目をしっかりと見開いた道筋である。しかし、作家の中には、大いなる叫びに答えないではられない者もある。そして、詩人の言葉をパラフレーズして応える。「私は、私の脂肪と血でもって、その燃焼を支払う」(ビアリク)。このように、作家は公の現実で活動し、そこに深く浸っている。彼の個人的見解を超えて、彼の大なり小なりの理解を超えて、彼の直観を超えて、そして彼のいかがわしい名前を超えて、作家は、彼の作家としての専門領域から、今日の公共生活の領域に欠けている特別なものをいくつかもたらすことができると私には思える。作家に特別な資質を4点挙げてみよう。

a) 作家は、今日欠如している言語的責任をもたらすことができる。「言語的責任」とは、美辞麗句、正しい文法、あるいは適切なヘブライ語といったことではない。作家は「言語の破壊」に対して闘うことができる。言語の破壊と欺瞞の進行が、我々に襲い掛かっている。破壊とは、文法的なことではない。優れたヘブライ語を話す人でさえ、言語を破壊することができる。今、イスラエルの地で生じている大規模で広範な戦争は、言葉の領域である。武器による発砲の量は、あらゆる時にあらゆる方向から発砲されている言葉の量に比べたらわずかなものである——その言葉の発砲は、私たち自身の間、私たちと敵対者との間、そして私たちと世界の間で行われているのだが。言語には多大な暴力があり、私はなにもそれを少なくする必要はないと思う。もし、言葉が武器ならば、その言葉は暴力的でなければならず、その暴力性をほやかす必要はない。しかし、勿論、言語を使用する際の責任感をもう少し要求することはできる。そして、それこそが、作家が、文学の領域からもちこめるものである。彼こそが、どのように言語において欺瞞ができるか、言語が何を隠しているのか、何をぼかしているか、どのように的を外すのか、どのように虚しく打撃をあたえるのか、見せることができる。また、言葉が用いている概念がいかに徐々にもうろうとしたものになってきたか、ということも。彼は、そのようにあいまいになった概念を明らかにしようとすることもできるし、使い古された言葉に生命を取り戻させること、逆に、意味を失った言葉を粉砕することもできる。また、言葉に、ほんの少しの論理を、最低限の一貫性を求めることもできる。

b) 作家は、彼の「職業」の領域から、個々の事例での道徳的感覚をもたらすことができる。文学的創作にはみな、何かしら道徳な態度が表明されている。それが露呈しているように、隠されているように。ここで強調されるのは、個別の事例、個々の事例での、道徳的な感覚の重要性である。というのも、ある特定の悪に対する特定の叫びを鈍らせる

ために、より広い文脈であらゆる道徳的な問題を提示しようとする試みほど、道徳的な逃避に至るのに最も簡単な方法はないからだ。国家には、全ての国家には、歴史的な描写を用いたり、経済発展の進捗を印象的に説明する図表や数字を用いたりして、叫びを黙らせる特別な能力がある。そして作家は、その議論を、もう一度、もう一度と、個別の事例に戻すことができる。そして、悪に対する非難を申し立て、それを隠蔽しようとする試みと闘うことができる。

1971年8月、政治的見解は非常に異なる20名ほどの作家が首相のもとに赴き、イカリットとビルアムのことについて主張した。この会談のせいで、侮辱と嘲りが彼らに浴びせられた。罵倒した連中の筆頭には、当然新聞記者がいた。この新聞記者たちは、自分たちのことを世界のあらゆることの専門家だと思っており、私たちは日々、彼らの道徳的説教や「賢い」提言を読んでいる。この新聞記者たちは、その会談に出向いた作家たちに対して、最初に対抗してきた。作家が、いったいどんな特別な権利があってこの問題に顔を突っ込むのだ。作家には、この問題にどれだけの専門性があるのか。大工や農夫と比べた時、作家は何において勝っているのか。

勿論、民主的な国家では、あらゆる個人は、国家のあらゆる事柄について、自分自身を専門家と考えてよい。作家にせよ教授にせよ、大工や仕立屋よりも優先権があるなどということは全くない。しかし、彼らの権利が、大工や仕立て屋の権利より小さいということもないのである。例えば、もし別の職種の集団が首相のもとにやってきて、イカリットやビルアムのことについて反対意見を論じようとしたら、彼女（首相）は彼らを決して劣らない愛情で受け入れたであろう。というのも、勿論、彼らは、作家よりも広い大衆を代表しているからだ。しかし、現実はそうではない。大工も仕立屋も、彼らに個人的にかかわらない道徳的な問題について話しには行かないのだ。

作家たちは、首相のもとに行き、長く続いた会談の中で、一つの限定された問題、あの例の悪について議論しようとしていた。一般的な道徳問題を理論的に話すことが目的ではなかった。勿論、ゴルダ・メイルには、ユダヤの民の預言とか、若者の教育とか、特に今話す必要もないようなよもやま話といった、「より心地のいい」話題について話をしたいという願望があったことは見え見えだった（事実、彼女はとても感じがよかった）。私たちは言った。「いいえ、私たちは、イカリット・ビルアムの犯罪についてだけ話したいのです。」みなが話した。いや、殆ど請願していた。しかし、無駄だった。その会談での失敗は明らかだった。そして、それによって、作家は、他の事例にも関わることに尻込みしてしまうようになった。これこそが、イカリットとビルアムの失敗そのものよりも、より深刻な失敗だった。それ以降、アラブ市民の問題に対して閉ざされていた心が、結局ユダヤ市民の問題に対しても同様に閉ざされていることが明らかになっ

た。というのも、それは同じ心だからだ。

ユネスコの場合のように、世界中の有名な作家が我々の弁護のために出てくるのを見るのは、私たちにとっても気持ちがいいものだ。我々に悪がなされたときに、芸術家や作家が沈黙しているのは腹立たしいことである。もし、イスラエルの国外にいる外国の作家が、私たちのために道徳的に関わることの意味があるとするなら、この国の作家が道徳的に関わることの意味もまたあるはずだ。

c) 作家は、その国の公共生活に対して、現実の複雑さをもたらすことができる。それは、精神的な現実において支配している一元化に対して反対を表現することによってである。

今日のイスラエル社会には、二つの深い精神的なプロセスが浸透しつつある。その二つとも、我々の文化と伝統に深く根ざしており、それゆえ、それらは危険である。増大しつつある一つ目のプロセスは、自己嫌悪のプロセスであり、同様に増大しつつあるもう一つのプロセスは、傲慢さのプロセスである。一方は、我々自身からの切断であり、ユダヤの民に関する完膚無き絶望のプロセスである。もう一方は、世界からの切断のプロセスである。この二つの対立するプロセスは、実は同じ源に由来する別の反応である。同様の現象は、二つの相反する反応を同時に働かせる人間の精神のメカニズムにもみられる。この二つのプロセスには私たちの文化に深く根付いた基盤があり、悪や愚かさの精神から生まれたものではないがゆえに、我々はこれらについてどんなに注意しても注意しすぎることはない。

作家とは、その性質から、複雑な状況を扱うのを常としており、白か黒かの状態にはいつも気を付けており、あらゆる状況で灰色の色合いを求めているものだ。このような作家だからこそ、自己嫌悪か、傲慢かという二つのプロセスに潜む単純化に対して闘うことができる。

現状の現実には、自己嫌悪に対する表面的ではあるが裏付けとなる。そして、自己嫌悪は、私たちの特徴、私たちの現実的な事項、つまり私たちの運命にもこだわるようになる。ユダヤ民族の80パーセントが離散の地にあり、彼らにはここにやってくる意図もないのに、ユダヤ民族とイスラエルの地の関係を雄弁に語ることへの嫌悪。「我々の存在が外国人への光となる」だの、「選民」だの、「宝の民」だの、あらゆる教科書にちりばめられた言葉に対する美辞麗句。それに反して、これらの仰々しい見せかけの言葉からは程遠い、墮落、不正、凡庸さ。そして、自己弁護、歴史的な苦悩を法定貨幣として利用すること。これらすべては、まさに現実的な事柄であり、自己嫌悪のプロセスはこうした事柄にこだわり、そのプロセスをさらに進めることになる。

他方、傲慢と孤立のプロセスもまた、私たちの生におけるもっとも実際的な現象にこだわっている。理想に対する民の独特の忠誠心、つまり、私たちのアイデンティティを守る能力。ここで重要なのは、守ってきたこと自体ではない。というのも、今日までアイデンティティが守られてきた民は他にもあり、その中には、私たちよりも古い民もあるからだ。そうではなくて、精神的な本質への忠誠心の中で守られてきたことが重要である。独特の連帯は、今でも私たちの中で高鳴っている。困難な状況の中に耐える能力、その内側の、本当の生命力、これらは、私たちの中のたくさんの人々の中に見出すことができる。そして、繰り返される打撃のあとで、埃の中を立ちあがり、自分自身の中で再生する能力。これらは全て、ここにいるのは、あらゆる他の集団とは異なり、すばらしい、特有の性質をもった集団であるという感覚を奮い立たせる。

そして作家は、この二つのプロセスに向き合った時、第一のまたは第二のプロセスを支える本当の事柄から目を背けることなく、バランス感覚をその元の場所に回復しなければならない。あらゆる現象の、否定的側面、暗い側面を見せなければならない。そして、現実感覚を深めること、周辺へ押し流されることを止めなければならない。私たちが、世界と私たち自身に戻さなくてはならない。私たちは、腐った社会ではない。腐った社会は、この最近の戦争で私たちが持ちこたえたように持ちこたえることはできない。他方、模範的な社会になり、それによって自分たちの存在を正当化するというような義務やふりもまた、私たちには必要ない。

d) 作家が、自分の「職業」の領域から持ち出し、政治的現実注ぐことの出来るもの、それは自由の感覚である。この2年間で、自由の感覚は、この国では大変打撃を受けている。おそらくそれは、この国だけではない。世界全体のことだろう。これが私たちをとらえた憂鬱の理由の一つだろう。我々は、我々の歴史において、あるいはこの地での短い歴史においてでさえも、この時代とは比べようもないほど困難な時代を経験してきたのだ、と、いって、さまざまな例によって証明して、慰めてくれる人もいるが、客観的には、彼らは正しいだろう。20年前、30年前、そして40年前には、今よりずっと危険な状況を我々は経験してきた。しかしながら、このように深い憂鬱は、より困難な状況では私たちが襲うことはなかった。というのは、私たちには、いつも運命は私たちの手にあるという感覚（その根拠は、もしかしたら幻の中にあるのかもしれないが）があったからだ。私たちは、自分自身を導くことのできる、自由の民である、と。この2年間で、政治的な見解の相違を超えて、運命論の感覚——よく知られたユダヤ人の運命——がますます私たちに支配してきた。

もし、ユダヤ人の運命に忠実であろうとする感覚こそが、初期のシオニストたちの心

に在ったのであれば、イスラエル国家は決して興ることはなかつたろう。もし、ユダヤ運命論の見解に反するものがあるとすれば、それこそが、シオニズムの中にあつた。そして、ユダヤ人は立ち上がり、言った。いや、ユダヤ人の運命とは、打ち勝つこと、変えることのできないものではないはずだ。もし、ユダヤ人の運命とはそんなものであるならば、その運命は、私たちを置く場所に居続けなければならない。シオニズムは、反運命の思想であり、自由、自己解放論、やりたいことは何でも可能だという思想であつた。ある場合には、それは、純粹であり、ナイーブでさえあり、向う見ずでもあつた。自由のそのような感覚を、私たちは、失いつつある。

自由は、作家の創作における基本的な感覚である。自由は、創作に不可欠な条件である。作家は、自分の読者もまた自由人であることかどうか、気にしなければならない。というのは、もし読者に自由が欠けていたら、彼はその作品を把握できないし、作品は存在することはない。作家は、廢れた自由の感覚を取り戻すことを手伝うことができる。結局のところ、自由こそが、ここでの主要な目的であつた。イスラエルの地、国家、これらは全て、ユダヤ人の自由を実現する手段であつた。それが突然、それら自身が目的になってしまった。確かに、ここでは、シオニズムと離散の地のユダヤ人の生活の間に明確な断絶があつた。そしてそれゆえに、ヘブライ文学は、これほど深くシオニズム運動に関係づけられていたのだ。ユダヤ人を解放すること、彼を足かせから解放すること、そして何よりもまず、彼自身の足かせから解放することであつた。

しかし、自由の概念には、自由のために戦うということをしないう自由も含まれる。この自由もまた、保証されなければならない。あなたにはあなたの自由を放棄する自由がある。ここにいたいと思わない人間は、去るのは自由だ。罫の感覚を作り出す理由はない。「仕方がない」という感覚によって、そして、閉塞感によって、罪を犯すことを心に抱いている人々を止めることができると考える人々もいる。しかし、これは、有効ではない。逃げたい、あるいは、放棄したいと思う人々を、何も止めることはできない。運命の感覚は、残ろうという決心がその責任感と自由からもたらされているような人々を、より一層憂鬱にするだけである。

イスラエルの作家は、彼がどつぷりと首までつかっている現実から、逆に何を受け取っているか。繰り返し彼の書くものの栄養になっているものは何か。一見、たくさんあるようだ。しかし、実際はごく限られたものだ。つまり、「大きなテーマ」が、我々の周りに束になっておかれていることは否定できない。「材料」は全く欠けていない。スウェーデン人、デンマーク人、スイス人といった人々は、彼らの鉛筆をかじりながら、大いに我々のことをうらやむだろう。ああ、もし、私がイスラエル人であるならどんな

に良いことか。イスラエル人には、本当のドラマがある。

何よりも死である。死とは、文学の古典的なテーマであり、真のテーマである。そして死は、我々の周りに散らばっている。その文学的な可能性を無視することはできない。作品の中の登場人物に関して、もう飽きてきた時、または、彼らをどうしていいかわからない時に、いかにも本当らしい死をこれらの登場人物にもたらすことは、私たちには簡単である。私たちはただ、彼らをミルイーム（予備役）に連れ出すか、または、戦争の半年前から物語のプロットを始めて、彼らを確実な方法で悲しい結末へと導いてやればよい。一方、デンマーク人作家やスウェーデン人作家は、彼らの登場人物に死をもたらすためには、とても気のきいた何かが必要だ。私たちには——比較的簡単だ。ここには利点がある。これは、また、劣悪な登場人物たちのイメージに、ちょっとした美、柔らかさ、悲しみといったものを与えてくれる。例えば、戯曲「シツ」における戯曲のチェルヘスのように。この極悪者が、戦に倒れると、突然このような栄光を、このような悲劇性を受け取ることになる。また、描写に深みのなかった登場人物たちも、彼らに死がもたらされると、突然、彼らは力強さを手に入れる。皮肉った言い方をすれば、このことは、「登場人物の形成」を楽にしてくれる。

しかしながら、ここには、多くの罫がある。嵐のような劇的な現実は、かげろうのような預言である。誘惑されるのは簡単、しかし、それを支配することは難しい。それは、私たちが外に放り出してしまうかもしれない。外的な出来事だけにとらわれ、内面的な感情をとらえ損ねるという事態を、私たちにもたらすかもしれない。私が読むヘブライ語の散文の作品のうち、少なくとも50パーセントは、戦争に関連している。これまで全く書くということを考えたこともなかった人間が、私たちの周りに起きている劇的な主題のために、いかに突然、書くという誘惑に負けてしまうか、あなたも見ることができよう。主題こそが作品を生み出しているのだが、そのような作品の中に優れたものの少ないこと！だとすれば、この現実には私たちのために何が残っているだろうか。連帯感が残っている。連帯感は、イスラエルの現実の、存在する根本的な財産である。そのあらゆる問題点、また、その痛み、その歪みにもかかわらず。連帯感は、最も辛辣なあなたの反対者との間にも存在する。連帯感は、本当の能力に翼を与えることができる。

バージニア・ウルフの「ダロウェイ夫人」のヘブライ語訳が世に出たばかりである。そして、再び、この素晴らしい偉大な作家に注目が集まった。ここに、彼女の経歴に関心向けると、彼女の自殺の事実が目飛び込んでくる。彼女は、1882年に生まれ、1941年に入水自殺した。人の自殺ほどひどいものはない。誰がその人のひどい痛みを知ることができようか。誰が、判断できようか。作家の自殺は、おそらく、さらにひどい。突然の創作に対する不信感、これは非常に憂鬱にさせるものだ。しかし、突然、私は驚

いた。「1941年のイギリスで自殺？」英国の——「最も美しい時に？」。自由のための、殆ど自分自身の存在のための戦争で、暗黒のヨーロッパで、少数対多数の戦争で、その歴史の中で最も重大な時点で——その時に、自殺？バージニア・ウルフにとっては、「イギリスの状況」が非常に重要で、イギリスで起こっていることが彼女にとって大変重要であった。英国は、ウルフの登場人物にとっての単なる背景や装飾ではなかった。英国は、その登場人物の本質そのものであった。バージニア・ウルフは、社会、そのさまざまな階層、その政治的な結びつきに関わっていた。英国にとってこれほど重要なときに、彼女は自殺した。つまり、イギリスにおける連帯感は、個人的な孤独感を和らげることができなかったのだ。

なぜか知らぬが、私には、以下のように思えるのだ。そして、もしかしたら、このような比較は、根拠がないものかもしれないが。つまり、私たちのもとでは、このようなことはありえないのではないかということだ。連帯感の力は、より大きいのではないか。なぜなら、私たちは、私たちの歴史に結びついているからだ。でも、これも間違っているかもしれないが。

注

- 1) 本稿は、85-76, 1989 (הוצאת זמורה ביתן) "הקיר וההר: מציאותו הלא ספרותית של הסופר בישראל" (ברכה זמורה ביתן) אברהם ב. יהושע, "הקיר וההר: מציאותו הלא ספרותית של הסופר בישראל" (הוצאת זמורה ביתן) 85-76, 1989 を著者の許可の上、翻訳したものである。